

関西国際空港護岸域におけるキジハタの行動様式

○大島知紘・光永靖（近大院農）・
増野祐一郎・辻佑一郎（京大院情報）・
三田村啓理（京大院情報・CREST, JST）・
荒井修亮（京大フィールド研・CREST, JST）・
岡本英明（シャトー海洋調査）・藤林栄蔵（新関西国際空港）

【目的】キジハタ (*Epinephelus akaara*) は大阪湾において栽培漁業の対象種として種苗放流が行われている。また、関西国際空港護岸域は水産動植物の採捕が禁止され、多様な生物の棲み場として機能し、キジハタの生息も確認されている。本研究では、関西護岸域でのキジハタの繁殖期（7-9月）における行動様式を明らかにするため、超音波テレメトリーによりキジハタを追跡した。

【方法】関西空港 2 期島護岸域にて漁獲したキジハタ 10 尾（雄 2 尾：TL 45.0-45.3 cm, 雌 8 尾：TL 30.4-40.8 cm）に加速度・深度センサー付き超音波発信機（V13AP-1H, Vemco 社）を腹腔内に挿入、放流した。また、設置型超音波受信機（VR2W, Vemco 社）を 2 期島北西側の護岸域中央部に 12 台設置し、2014 年 7 月 23 日から 12 月 24 日まで受動追跡を行い、キジハタの行動情報を取得した。

【結果】放流した 10 尾のキジハタは 12 月 24 日まで継続的に関西護岸域に定住し、海底近くの深度 11 m から 12 m に最も多く出現した。深度 11 m の水温が日平均 25°C 以上の期間（8 月 4 日-9 月 23 日）は、25°C 未満の時期よりも活動量が高かった。また、全ての個体で夜間の活動量が高かった。さらに、8 尾中 7 尾の雌において朝から昼にかけての受信頻度が低かったが、雄にはこの傾向が見られなかった。2 期島護岸域には消波ブロックが導入されており、消波ブロック内部にキジハタが潜り込むことにより受信頻度が低くなったと推察される。このことは、朝から昼にかけては雌と雄が異なる場所に居たことを示す。以上の結果から、同海域に定住するキジハタは、夏季の夜間に活動性を高め、繁殖を行っている可能性が示唆された。